

『やさしい神だなデザインコンテスト』入賞作品

『やさしい神だなデザインコンテスト』開催について

募集期間 平成24年7月15日より9月15日まで

埼玉県神社庁では、平成20年に『未来の神だなデザインコンテスト』を開催しました。

これは、近年増加するモダンな住宅に似合う神だなのデザインを一般公募し、優秀な作品の製品化を目指したものです。全国より281点の応募を頂き、ここから生まれた神棚『いのり301・501』は、県内神社を中心に頒布されています。

今回行いました『やさしい神棚デザインコンテスト』は、2回目となる神だなデザインコンテストで、募集した神棚デザインは、1回目の作品を集計し、そこから導き出された『おまつりしたい神だなデザイン』を一般公募したものです。

高齢者を中心に一人暮らしが増加するこれからの住宅事情と、前回の神だなデザインコンテスト集計結果から、今求められる神棚の形状は、『限られた住居スペースでもおまつりでき、お供えやお札のまつり替えなどが安全に、かつ手軽に行える神棚』でした。

そこで、一人暮らしの方々がおまつりしやすい神だなのデザインであり、「人にやさしい」「環境にやさしい」「お年寄りにやさしい」など、色々な「やさしさ」を持った神棚デザインを募集しました。

今回は、全国から202通の応募があり、審査の結果、大賞1点・佳作6点・審査員特別賞1点（優秀賞該当なし）を選ばせて頂きました。応募下さいました方々に感謝申し上げます。

審査員は、埼玉県神社庁副庁長を始め教化委員会関係神職の他、(株)ミサワ アソシエイツ 一級建築士事務所代表である三沢亮一氏にも特別審査委員をお願いし、厳正に審査を行いました。

入賞作品につきましては、三沢氏に総評、各作品へのコメントを頂きました。作品と合わせてご覧下さい。

なお、コンテストの募集にあたり、神棚について若い世代にも考える機会となるよう、そして、近い将来それぞれの仕事に就いたとき、このコンテスト参加の経験が活かされることを願って、建築学や住居学の学科を持つ大学や専門学校などにもポスター・チラシを送らせて頂きました。ご協力頂きました学校関係の皆様には厚く御礼申し上げます。

埼玉県神社庁教化委員会

三沢亮一氏のコメント

<全体評価>

今回、『やさしい神だなデザインコンテスト』の審査をお引き受けし、応募作品を拝見させて頂けた事は、私にとって、とても貴重な体験でした。

応募者一人ひとりが、『一人暮らしの神だな』というテーマに向って描いた、現代のライフスタイルにもマッチする神棚のデザインやアイデアは、どれをとっても素晴らしいものでした。

ライフスタイルや技術が変化していく中において、すばらしい日本文化を見直す流れは、日に日に大きくなっているように感じられます。その中で、神棚をおまつりしたいと思っている方々も増加傾向にあるのではないのでしょうか。

特別審査委員 三沢亮一氏プロフィール

昭和22年生まれ 早稲田大学理工学部建築学科卒業

都心の高層マンションをはじめ数多くの共同住宅プロジェクトを手がける。住宅における内部と外部の関係、ライフスタイルとプランニング、さらに家具や小さな部品に至るまで、こまやかな心でデザインを進め、高い評価を受ける。オフィスを渋谷区神宮前に構え、現在、埼玉県さいたま市浦和区に在住。

今回の『やさしい神だなデザインコンテスト』は、日常の生活の中でより親しみ易く、より使い易い神棚の意匠を求めて行われました。ここから生まれた神棚は、人々の暮らしとより密接につながり、生活の中心となっていくでしょう。

そして今回の『一人暮らしの神棚』というテーマにも非常に考えさせられました。一人暮らしをする方々は、若者と高齢者に多く、その一人暮らしの生活、住戸は多様であり、その中で棚を吊って設置していた従来型の神棚を設置するのは難しく、特に高齢者が安全におまつりできる神棚が求められているからです。現代の住宅様式に沿った大きさやデザインが求められています。

限られたスペースを有効活用し、調和のとれたデザインであり、一人暮らしの高齢者にも無理なく神棚をおまつりできる意匠が存在するか。これらの事を考えながら評価させて頂きました。

<大賞> 遠藤 ヒサ (群馬県) 52歳 男性



かつて、床の間や暖炉が家の中心であった時代がありました。それらは『家の中心』として家族が憩い語り合う場でありました。洋の東西を問わず、現在の住宅では『テレビ』が床の間や暖炉の代わりとなっています。

空間には中心というものが必要で、これがないと人間は居心地の悪さを感じてしまいます。これは、たとえ一人で暮らすワンルームマンションのような狭い空間であっても、向き合う対象を持たなければ、心休まる場にはなりません。

そうした意味で、まさに神棚というのは、家の中心・向き合う対象の一つとして重要なアイテムと言えます。『中心』を備えた住宅—インテリア空間—だからこそ、時間や季節の変化を感じながら静かな時間を過ごせるのです。

さて、この作品ですが室内の中でおまつりする場所を選ばず、持ち運ぶ事も出来、更にコンパクトな上、お供え物のトレーを備えており、神棚としての機能を十分に備えたデザインが評価されました。無機質なアクリルと言う材料と、自然を感じさせる白木のトレーが爽やかさを感じさせる作品です。

<佳作> 年森 慈明（福岡県）29歳 男性



“神棚”に他の機能（作品は時計）をつけるという発想は賛否両論ですが、神棚に親しみのない人にとっては、他の機能をつけることでより身近な存在になる“きっかけ”を作ってくれるのではないのでしょうか。
お札を大切におまつりするという気持ちをさらに発展させる事により、より良い作品になると思います。

<佳作> 小林 一輝（神奈川県）20歳 男性



木の暖かさとともに“人”と云う文字を使う事に精神的な深みを感じた作品でした。
供え物がおふだの前ではなく横にあるという点を工夫すれば、さらに完成度が高くなるのではないのでしょうか。

<佳作> 林原 淳（奈良県）38歳 男性



パーツを組合せることで様々な形のバリエーションができるという多様性を評価させて頂きました。
お供え物を置くスペースの安定性をもう少し検討できれば、今後のバリエーションの可能性も広がると思います。

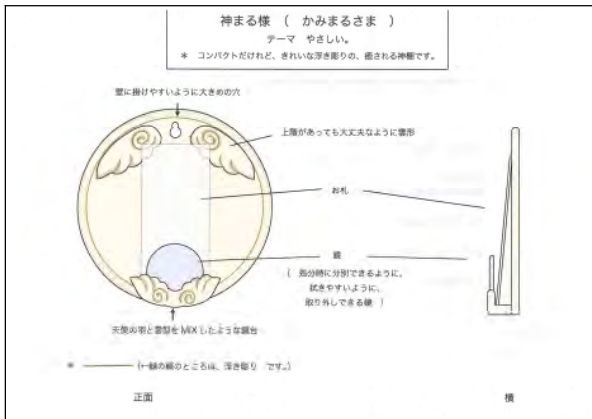
<佳作> 武藤 度秀（群馬県）19歳 男性



上階がある住宅ですと、どうしても神棚の上を人が歩いてしまう場合があります。そのような時は、神棚の上（天井）に『雲』と書いた半紙を貼り、「これより上は空である」としておまつりします。

この作品は、機能を最小限におさえ、シンプルかつ親しみやすいデザインの中に、『雲』をかたどったさりげないワンポイントデザインが評価されました。

<佳作> さいみょう ゆかり（東京都）41歳 女性



今までにない円形の神棚で、とても新鮮に感じました。丸い形の中に、丸い神鏡が印象的です。天使の羽ではなく、『雲海』のイメージをデザイン出来れば、まさに“高天原に坐します天照大神”という印象になったと思います。

<佳作> 高木 美香（長崎県）38歳 女性



神棚には神様のお食事であるお供え物（米・酒・塩・水）の他に、神を飾ります。造花を飾ってある神棚もありますが、神様のお力が満ち満ちていないように感じます。

この作品はシンプルでコンパクトながら、必要とされる要素を丁寧に取り入れたところが評価されました。しかし神は、常に瑞々しいものを飾りたいものです。

<審査員特別賞> 鈴鹿 知紘（兵庫県）22歳 男性



東日本大震災を経験した私たちは、心のどこかに喪失感を感じながらも、これを乗り越えようと様々な形で、まさに原点からの生活を再スタートさせました。この経験から私たちには、“物を大切にする”という考えが、自然と育まれてきているように感じています。

この事は次世代を担う子供たちに、“物を大切にする”という心から、さらに“ゼロから物を造っていくたのしさ”に繋がってってくれるのではないかと、密かに期待しています。

この作品は、そんな“物を創作する楽しさ”を教えてくれる作品として評価させて頂きました。廃段ボールの再利用という考えは、『大切な神様をおまつりする』という点では問題がありますが、柔らかい素材で、落下しても安全という点で、仮設住宅などの緊急時の神棚としては大変良い作品です。身近にある素材から『創作』を実感でき、自分の神だなどとして子供でもおまつりできる神棚だと思えます。

以上